

土耕栽培 イチゴ 4割増収

さん(48)は、この装置を導入し、効率的なCO₂散布を実現。土耕栽培で果実収量を4割増やした。中でも単価が高い年内の出荷量が拡大し、所得向上につながった。

農業情報通信技術(ICT)機器を手掛けるテヌートの「プレス」は、二酸化炭素(CO₂)局所施用コントローラだ。福島県須賀川市でイチゴをハウス50区で栽培する小沢充博

CO₂局所施用装置 テヌート



親苗の株元にチューブを置いてCO₂を供給する(福島県須賀川市で)

1回転目の子苗重視

小沢さんは2017年4月に「プレス」を導入した。子苗の効率的な生産や果実の増収が狙いで、ハウス全体を対象とするCO₂発生装置と併用している。親苗は11月に購入し、プランター1個当たり7株を植え、3月中旬に栽培ベッドに上げてランナーを増や

し始める。この時点ではハウス全体でCO₂濃度を管理。6月上旬に「プレス」を使った局所施用に切り替える。親苗の株元に多孔質チューブを敷き、午前7時から午後5時まで、株の近くのCO₂濃度が350ppm

450ppmになるように設定する。小沢さんは、11月20日ごろから果実が収穫できる1回転目の子苗を重視する。単価が高い時期に当たり、この子苗をいかに増やすかが経営を大きく左右するためだ。従来は1回転目の子苗を増産するには、親苗そのものを増やすしかないと考えられてきた。しかし、小沢さんは「プレス」の導

入で、同期間・同面積で1回転目の子苗を4万本に増やした。これまでに比べて4割の増産だ。仮植えした子苗の活着が良くなる効果もあった。不良子苗の発生率は、従来のが5%ほどから、1%以下に減った。苗生産は、9月までの5回転目まで行っているが、CO₂の局所施用は8月の3回転目までとしている。

なり疲れの軽減にも

一方、12月から翌年5月の収穫時期には、CO₂濃度を350ppmと高めに設定して全体と切り替えるながら施用し続ける。イチゴの収量は、完熟収穫で10区当たり6.5トンだった。導入前に比べて4割増となる計算だ。また、なり疲れの軽減にもつながったと実感する。以前は花がつくまでに葉が7、8枚出てしまうことがあったが、導入後は安定して葉が5枚ごとに花がつくようになった。バレンタインデーやひな祭りなどの物日が続く2、3月でも安定した収穫が実現できている。小沢さんは「花が安定してつくるのは、光合成がしっかりできている証拠だ」とみる。

施用コスト抑える

「プレス」は、施設のイチゴやトマト、露地のダイコンやハクサイなどの育成促進のため、葉や株元にピンポイントでCO₂を供給するための装置だ。時間やCO₂濃度、風量、日射などを基に、無駄がなく施用できるのが特徴。運用コストの削減につながる。問い合わせは同社、ファクス03(6859)8401。

かん水のタイミンケも以前は厳寒期に必要な日があったというが、導入後は1日1回は行い「かん水量としては4倍ほどに増えているのではないかと旺盛な生育を実感する。

「プレス」の設定を確認する小沢さん(同)



を手に説明する岩本利雄(テヌート)の商品「G. S. I.」のモニター(東京都目黒区で)

資材の輸入、販売証農場を持つ。約6億円。東京都目黒区中代官山4階、電03

ナーカス

、2017年に発売し「R」の、アーム部を小さくし。アームの高さは従来機に比べて20センチの高さは、農家でも持ちやす低い65センチにした。最大直径24センチで、。R」との併売で、作業内容に合わせた分けを提案する。価格は9800円(税や種苗店、資材店)。問い合わせは同ダイヤル(0120)

資材ナビ

い登録作物として非結球レタス、ピス、ブドウ、オウ、菊を追加した。「ードフロアブル」カメシ類やウンとする。新たに、による散布が可能

ください

資材があれば、資農機の型式など)所、電話・ファクール不可)を明記き、または、ファラしてください。〒104-8426(所日本農業新聞営業部)係、(6281)5870。